

氏名 本 後 隆 史

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 乙 第 4 9 0 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和46年12月31日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学 位 論 文 題 目 成人期肝癌・肝硬変の家族性発症に関する臨床的ならびに統計的研究

論 文 審 査 委 員 教授 平 木 潔 教授 大 藤 真 授教 小 川 勝 士

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

原発性肝癌 37例，肝硬変 246例を対象として，肝癌または肝硬変の家族性発症 29家系を収集した。

- (1) 対象 283 例の血縁者の肝癌，肝硬変発症の頻度は同胞 1.9%，両親 3.9%であり，この頻度は対照の肝炎患者におけるそれに比して有意に高かった。
- (2) 家系内の発症者の間で，生活歴が異なるに拘らず，臨床病型や経時的な病理組織所見の推移が近似する例があった。また発症者には，慢性肝炎活動型や亜広汎性肝壊死から肝硬変の完成に至る過程が異常に速やかなものがあった。
- (3) 29家系について，外因として肝炎の流行と飲酒，内因として糖尿病素質の与えた影響を検討したが，家族性発症の主因をこれらに帰することはできなかった。
- (4) 家族性発症の母子例では，他に比して子の発症率が高かった。また Au 抗原の検索を2家系の3親子例でおこなった成績では，母親（発症者）とその娘（発症していない）に陽性で，父親（発症者）が陽性でもその子は陰性であった。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，成人期肝癌・肝硬変の家族発症に関する臨床的ならびに統計的研究と題するもので，昭和33年より昭和41年の間に岡山大学医学部第一内科に入院した多数の肝癌および肝硬変につき，家族性発症を詳しく調査した。

その結果肝癌又は肝硬変の家族性発症に遺伝要因が推測されること母子例ではこれに加えて肝炎ウイルスの家族内感染が示唆されることを示している。

以上の研究は，重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認め，本研究者は，医学博士の学位を得る資格があると認める。